

「地域の中で障害者の力を生かす CBRの推進に貢献したい」

障害者が自己実現できる障壁や差別のない社会の実現を目指して、障害者自身や家族、地域住民が主体となって取り組むCBR (Community-Based Rehabilitation)に力を入れるスリランカ。同国の社会福祉分野で8年間もの隊員活動経験を持つ加藤尚子さんがCBR推進に向けて新たな試みの扉を開いた。



文・写真 = 梶田 誠 (写真家)
text and photos by Kajita Makoto

社会福祉の向上を目指す スリランカと協力隊

インド洋に浮かぶ島国スリランカ。1972年に英連邦内自治領からの完全独立に際して、セイロンから「光り輝く島」を意味する現在の国名に改称した。しかしその名とは裏腹に、人口の8割を占めるシンハラ系住民の優遇政策に反発したタミル系住民との間に民族紛争が発生。83年以来、タミル系過激派組織「タミル・イーラム解放の虎」(LTTE)が北部州、東部州の分離独立を求め、政府軍との内戦状態が長く続いた。2002年に停戦合意が成立したが、今年に入って再び衝突が深刻化している。

この国に青年海外協力隊の派遣が始まったのは81年4月。3人の隊員が派遣されてから25周年を迎える現在までの派遣人数は660人に上り、そのうち96人の隊員が社会福祉分野の支援に携わってきた。

スリランカ政府は、政府10カ年計画の中で社会福祉施策を重点課題の一つに掲げており、中でもCBR (Community-Based

Rehabilitation)プログラムの推進に力を入れている。CBRプログラムは、農村部の障害を持つ人々のために、地域の資源を活用した地域社会中心のリハビリテーションプログラムで、80年代初めに社会福祉省が導入した。中央政府、州政府、県、郡村レベルでのCBR運営委員会を設置、政府担当者やCBRボランティアを対象とするトレーニング・グコースの開催などが行われている。しかし、モニタリング・評価システムが整備されていないこともあり、CBRの推進の遅れが問題視されている。

これまでスリランカでは社会福祉分野の隊員が、障害児者施設、障害児幼稚園、障害児職業訓練校などの施設を拠点に支援を展開してきたが、個々の点的な活動にとどまってしまうことが多く、限界があった。そこで、CBRプログラムを促進し、同国の社会福祉の向上を目指して、個別の隊員の活動を統括し



森原美保隊員(養護)と一緒に地方の障害児幼稚園を視察する加藤さん。スリランカでは継続的に巡回指導・講習会が行われ、先生の能力も向上している

3度目のスリランカ 赴任

てより効果的・効率的に展開していくため、協力隊にCBRチームが組織されることになった。その重責を担ったのが、シニア隊員の加藤尚子さん(プログラムオフィサー)だ。隊員のグループ活動のまとめ役であるシニア隊員は誰でもなれるものではなく、過去に隊員として活動した経験があることが望ましく、語学力・技術力、リーダーシップが求められることはいうまでもない。いわば隊員の「エキスパート」と考えればいだろう。

加藤さんは92年12月、作業療法士としてスリランカでの活動をスタートした。3年間の活動を終えて帰国後、一時期、国際協力から離れるが、5年間のブランクを経て、2000年8月に再びスリランカの地を踏む。スリランカ政府側の協力隊受入窓口である対外援助局からの要請で、協力隊プログラム推進のため協力隊活動の理解促進、広報、案件発掘などを担うシニア隊員、プログラムオフィサーとして赴任したのだった。その

Kato Naoko

青年海外協力隊シニア隊員

加藤 尚子





お絵描きを楽しむ障害児を指導する幼稚園の先生。恵まれた教育環境ではないが、隊員の活動の成果は確実に現れている

プログラムオフ「イサー」として3度目のスリランカ赴任を果たす。2度目の任期終了からわずか3カ月後の再赴任の理由を尋ねると、彼女自身が必要性を訴えたCBRチーム派遣を担うシニア隊員の適任者が見つからず、ようやく実現したCBRプログラムへの支援を途切れさせないために、自ら

シンハラ語での活動報告の指導といった活動そのものだけでなく、生活面や隊員としての姿勢、精神面も含む隊員活動24時間すべてをサポートしていたからだ。チームで派遣されている隊員だけではなく、その他の社会福祉分野で活動している養護、ソーシャルワーカー、理学療法士などの隊員のサポートも求められている。

隊員には20代から30代前半の青年が多く、2年間の活動中にはさまざまな壁にぶつかり、悩みを抱える者も多い。初めて彼女と出会った04年11月の取材のこと。とあるイベント後の打ち上げで集まった隊員たちが、活動のあり方について侃々諤々と論争を始めた。身体障害者職業訓練校で活動している隊員が、「入学してくる生徒が障害者でないから、教えられない」と言い出し、それを聞いた彼女は、夜が明けるとまで隊員に付き合っ話を聞き、アドバイスを与え、叱咤激励を繰り返した。

外から見ればささいなことでも、現地でボランティアとして活動している隊員にとっては、納得できないことが多々ある。言語の問題だけでなく、現地の文化や人々の習慣、考え方の相違などから生まれる悩みや葛藤を抱えながらも隊員が活動を続けられるのは、現地の事情を熟知し、隊員としての経験も豊富な加藤さんのような存在が身近にすることが大きいに違いない。

Kato Naoko

かとう・なおこ 愛知県出身。1991年名古屋大学医療技術短期大学部作業療法学科卒業。92年青年海外協力隊員(作業療法士)としてスリランカに赴任。96~2000年病院勤務。同年、協力隊プログラム推進のためのシニア隊員(プログラムオフィサー)としてスリランカに赴任。04年シニア隊員(「社会福祉サービス向上プログラム」のプログラムオフィサー)として再びスリランカに赴任。

3年3カ月に及ぶ活動期間中に「社会福祉サービス向上プログラム」派遣方針の見直しが行われ、社会福祉分野での経験を持つ加藤さんが関係機関との協議を進める中で、CBRチームによるプロジェクト立ち上げの話が持ち上がった。そして04年2月、彼女は「社会福祉サービス向上プログラム」における「プ

名乗り出たそうだ。「社会福祉サービス向上プログラム」プログラムのオフィサーの任務は、CBRチームの活動の推進や、関連行政機関と社会福祉分野のNGOとの連携強化・促進のほか、派遣中の隊員の活動支援も行うことだが、これが一筋縄ではいかない。隊員が配属されている機関との交渉から、



建設中の障害児幼稚園の現場を確認するためにあぜ道を行く加藤さんたち。成人でさえ歩きにくい場所での建設が始まり、雨期の通園が気がかりだ。幼稚園が新設されることは地域にとって朗報だが、まだまだ課題も多い

各種障害者施設における障害児療育への技術支援、障害者の生活の質の向上支援、職業訓練での技術支援などを実施するプログラム。将来的には施設を地域社会におけるCBRのリソースセンター的役割を持たせることも視野に入れた協力活動を展開していく。また、スリランカの高齢者対策に応じて、高齢者の心身の健康を維持、増進するための支援を実施し、CBRプログラムとの連携による高齢者福祉の具体的なプログラムを実践する。

チーム活動の成果に期待

CBRチームには今年から3人の隊員が派遣され、いよいよ本格的に活動が始まるうとして

いる。CBRプログラムを推進する社会福祉省は、協力隊に対して、専門技術分野での貢献を期待しているようであったが、加藤さんは、障害者自身や家族住民たちがコミュニケーションの問題を分析し解決策を探る地域社

会に根差した取り組みを推進していくためには専門技術だけでは不十分だと考えた。そのためCBRチームは、専門技術を有する養護の隊員と、村落開発普及員、青少年活動といった住民の参加の促進や地域社会をつな

ぐ役割を担う隊員とで構成されている。複数の隊員がチームを組んで行う活動は、隊員同士の連携の効果が期待される一方で、運営面で難しい面もある。専門家やシニア隊員などある程度の実績を持つ者が連携するのは異なり、経験の浅い隊員同士の連携だけに、実際に活動を始めるとい



津波被災者支援の一環で、今年2月に開催されたバレーボール大会。男子18チーム、女子11チームが参加し、朝から始まった試合は、深夜の男子決勝でフィナーレを迎えた



スマトラ沖大地震・インド洋津波災害の被災地避難所で、隊員やスリランカ在住日本人らがレクリエーション活動を実施。男女対抗綱引きで力を合わせる女性たち。劣勢を見ておばあさんも加わった

れば分からない部分も多い。加藤さんらの奮闘によって産声をあげたCBRチームがこれからのどんな活動を展開していくのか。その成果から、また隊員グループ活動の新たな可能性が広がるに違いない。



北中部州の社会福祉事務所打ち合わせをする加藤さんと岩重悠子隊員(村落開発普及員)(右)。地域に密着する州・郡レベルでの綿密な協議が、CBRプログラムの推進に不可欠だ

CBRチームの有機的な活動で支援の効果を高める

津波被災者のケアに奔走

2004年12月末、スマトラ沖大地震に伴う大津波がスリランカを襲った。被害の大きさを目の当たりにした加藤さんは、すぐさま隊員たちと被災地の支援活動に乗り出した。それは、倒壊した住居の瓦礫を撤去する作業や、救援物資の仕分け作業、被災地避難所における被災者向けレクリエーション活動など多岐にわたった。

特に避難所でのレクリエーション活動や被災者の心のケアのための活動を重視した彼女は、スリランカ事務所に訴えかけ、短期の隊員派遣を要請する一方、毎週末には自らハンドルを握って南部州被災地を巡り、隊員有志らとともに被災者を励ました。その集大成としてゴール県全域を対象に、バレーボール大会が06年2月18日に開催された。バレーボールはスリランカの国技で、とても人気のあるスポーツだ。その日は男女合わせて29チームが夜遅くまで熱戦を繰り広げた。

協力隊は1965年の派遣開始から昨年40周年を迎え、転換期にある。さまざまな制度改革が実施中で、シニア隊員の制度も変わり、新たな役割を担う「フィールド調整員」として生まれ変わった。加藤さんは、最後のシニア隊員として、今日もサリーに身を包み、スリランカの地を東奔西走している。



バレーボール大会で線審を務める加藤さん。大会のために、隊員やスリランカ在住日本人、地元NGOなど多くの人が力を結集した

複数のボランティアによるプロジェクト性のある案件において、ボランティアの活動に対する種々の支援を行うとともに、関連分野・セクターに関する知識・経験・現場感覚を生かしてチームやグループとして派遣する案件やプログラムの運営管理をより現場に近いレベルで行う。